

# 受容と同化の観点から見た 20世紀初期テキサス日系人の生活史再考

武井 勲<sup>\*1</sup>

Reconsideration of the Life History of Early Twentieth-Century  
Japanese Texans in Terms of Social Acceptance and Assimilation

Isao TAKEI<sup>\*1</sup>

This paper attempts to reconsider the life history of early twentieth-century Japanese Texans in terms of social acceptance and assimilation. Their intention was to settle down in Texas primarily to establish large-scale rice farming, and develop a good relationship with local citizens. Their socioeconomic presence and trustworthiness were most apparent when the 1921 Texas Alien Land Bill called for an amendment to exempt existing Japanese from ownership or leasing of agricultural land in the state. This paper suggests that adding the case history of Japanese Texans to our knowledge would possibly modify our ordinal view of *Issei*, whose descriptions are almost always derived from the West Coast of the U.S.

## はじめに

本稿は、20世紀初期のテキサスにおける一世（以下、「テキサス日系人」）の生活史を、受容と同化の観点から再考しようとするものである<sup>1</sup>。19世紀末からのアメリカへの日本人移民は、一時滞在型の出稼ぎ労働者が主流であったのに対し、テキサス日系人は事業としての農業経営を目指してやって来たという点で、性質が大きく異なる。日米双方の資本の下、資産家や実業家、政治家などがコロニー（集団居住地）を整備し、同郷から親族と労働者を呼び寄せた。農場の経営者たちはコロニーを束ねる手腕に長けただけでなく、地域住民と良好な関係を構築した。移住と開発が州全体の発展と利益を意味した時代、日本人はその友好的姿勢と経済的恩恵で評価され、奇異の眼で見られることは少なかった。

本稿ではテキサス日系人の受容を示す好例とし

て、カリフォルニア州に倣って一世の土地の賃借および購入を禁ずる、外国人土地法が1921年に制定されようとした際、既得権条項が認められた経緯を取り上げる。また同化理論的視点から、テキサス日系人の受容の要因を挙げてみる。我々が持つ一世の理解は一般的に、西海岸での経験に基づくことから、彼らの再考は異なる一世の姿を模索する上でも有益であろう。

戦前のテキサス日系人を知る手掛かりとなる資料の多くは戦時中、疑いを持たれることを恐れた彼ら自身の手によって破棄され、当時を知る一世や二世の聞き取り調査も今となっては不可能である。本稿では Thomas K. Walls 氏の著作やテキサス大学サンアントニオ校テキサス文化研究所の出版物といった、既存の記録を頼りに議論を試みたい。標本数が少なく、基礎的な情報に限られるが、センサスの量的データから得られた人口動態的特徴（例えば出身階級や学歴など）を加味する余地

\*1 日本大学国際関係学部国際総合政策学科 准教授 Associate Professor, Department of International Studies, College of International Relations, Nihon University

もある。また、本稿で取り上げるのは一世であるが、収容所や合衆国軍における経験も含め、当時青年・成人期を迎えた二世の考察も必須である。このように、テキサスにおける一世および二世のおよそ40年間に渡る戦前・戦中期を受容と同化の観点から見渡すことが筆者の課題であり、本稿はその出発点であることを、予め記しておきたい。



写真1 テキサス大学サンアントニオ校テキサス文化研究所の日系人展示コーナー（2011年3月筆者撮影）

## テキサス日系人の概要

20世紀初頭、日本人のテキサス移住が本格的に始まったきっかけは、米作であった。メキシコ湾沿いの米作事業は失敗も見られ、隣接するルイジアナ州に後れを取っていた。そこでヒューストン商工会の会頭は、日本人による米作農場の設立を1902年に現地を視察に訪れたニューヨーク日本総領事の内田定植に相談した。テキサス南部には肥沃で安価な、米作に適した広大な草原があることを記した内田の報告書は、多くの人々の目に留まった<sup>2</sup>。

内田の呼び掛けに応じたのは、高名な武家や実業家、地主の次男以下の若者であり、財産を築いて帰国することを願った当時の一般的な日本人とは異なり、定住して米作の生産拠点を築くことを目指した<sup>3</sup>。彼らは、主に同郷から若い单身男性を呼び込み、豊富な資金を以て大規模かつ永続的なコロニーを構想したのである<sup>4</sup>。

表1. テキサス州の日本人人口<sup>5</sup>

1890年	1900年	1910年	1920年	1930年
3人	13人	340人	449人	519人
1940年	1950年	1960年	1970年	1980年
458人	957人	4,053人	6,537人	10,502人

米作コロニーの設立者で最も有名なのが、西原清東である。西原は1861年、高知県土佐市の武家に生まれた。立志社英語学校でヨーロッパの政治理論を学び、板垣退助らに従い、自由民権運動に身を投じた。その後、茂松法律学校で法学士を取得する。1886年に代言人（弁護士）試験に合格し、同年事務所を開業後、1898年に衆議院議員に当選、1899年には同志社大学の第4代総長に就任した。キリスト教徒であった西原は1902年に渡米し、コネチカット州のハートフォード神学校に留学した際、内田が最初にヒューストン郊外の米作候補地の視察を依頼した人物である<sup>6</sup>。

1904年にミズーリ州セントルイスで開催された万国博覧会では、テキサス米のディスプレイが登場した。日本からの実業家、議員、学識者らは展覧会を訪問した後、西原コロニーに立ち寄っている。内田の報告書をはじめ、西原ら先駆者の成功が雑誌や新聞、書籍を通して伝えられると、多額の資本を要する大規模な日本人の農場が、テキサス南東部のメキシコ湾沿いの平原に点在していった<sup>7</sup>。1908年までに、少なくとも30件の米作事業が日本人によって展開されたのである<sup>8</sup>。1910年にテキサスに居住していた日本人の8割以上が、米作に従事していたと推測される<sup>9</sup>。

日本人による米作はヒューストン近郊のウェブスター周辺やボーモントといった南東部で1903年に始まり、1908年にピークを迎え、米の価格が下落した第一次世界大戦後に衰退した。その後、日本人は輸送園芸による野菜栽培、果樹園や種苗場といった他の事業に見出した。特に1921年外国人土地法以降テキサスにやって来た日本人は、概して自営農家ではなかった。農業労働者やレストラン労働者もいたが、多くは苗木屋か花屋になった<sup>10</sup>。日本人の居住地域は、1920年までにエルパソやリオ・グランデ川流域地方（メキシコ湾に近い、ブラウズビルからマカーレンにかけての一带）にまで及んだ。

## テキサス日系人の生活史

市民の大部分は、テキサス日系人に対して肯定的であり続けた。競合相手ではなく、州全体の利益のために農業経済の発展を目指している仲間と認識されていた。実際に、日本人米作農家の多くは日本人以外の雇用を創り出していた。土地を購入・賃借し、高価な農機具を購入するなど、地域経済に多額の資金を投資していた。また、彼らはテキサスに永住する拠点を築くことに真剣に取り組んだ。市民権を得る資格が無くとも、現地に積極的に溶け込んでいくための努力を惜しまなかった<sup>11</sup>。まず人物から、次いで暮らしの側面から、いくつかの例を以下に示したい。

### 1. 人物から見た受容と同化

#### ①日本人最大のコロニーを設立した岸吉松

新潟県長岡市の名家に生まれた岸吉松は、ボーモントとオレンジの間のテリーで、テキサス日系人最大の1万エーカーの米作コロニーを経営した<sup>12</sup>。彼の地域に対する献身的取り組みの一部を挙げると、7エーカー以上の土地を近くの学校に譲渡し、子供向け農業クラブの運営に携わり、公民やアメリカの歴史を教え、愛国的な歌の合唱や物語の朗読を行った。子供たちはまた、裁縫、園芸、食料の缶詰法や保存法といった実用的なスキルも学んだ。こうした教育・文化活動や町の整備に携わった他、郡の農業組合と協議するなど、地域の問題解決への関与を惜しまなかった。メキシコ系、アフリカ系、ヨーロッパ系を含む現地労働者も雇った。岸のこうした地元の行事への参加や慈善的な貢献は、日本人の成功に対してともすれば一部の人々が抱いたであろう敵意や偏見を取り除くのに、大いに効果があった<sup>13</sup>。

1920年代に岸コロニーを訪れた研究者の記録がある<sup>14</sup>：

岸はアメリカナイズしており、敬虔なキリスト教徒だ。彼はコロニー内部で積極的に宗教活動を行っているだけでなく、ロータリークラブの会員でもあり、郡が直面する全ての問題に関心を寄せている。コロニー内の岸の

住まいは二階建てで、アメリカ製の家具が控え目に、かつ快適に備わっている。…彼のコロニーでは、アメリカ製の農機具とアメリカ式の農業手法が取り入れられている。…

コロニー内に居住する家族はどれも、4人から8人の子供を抱える大所帯だ。これらの子供たちは、善悪の判断を教えることに多くの時間を費やすことをいとわない両親により、良く躰けられている。子供たちは皆優秀で、知識を何でも素早く吸収する。…規則として、子供たちは皆身なりを整えている。

岸コロニーの印象として、規則正しくまとまっており、満足感を見せており、賑やかで、慣習や理念において完全にアメリカ的である。

一方、大規模農業に従事するテキサス日系人には、くつろぐゆとりはあまりなかったようだ。1910年の移民委員会の報告書には、以下の記述がある：

…日本人たちはかたまって静かに暮らしているので、農場を発展させる勤勉さがなければ、隣人たちは誰も彼らの存在に気付かないだろう。

経営者以外のテキサス日系人は、キリスト教徒であれば教会に参列すること以外は、地域住民との付き合いも無く、孤立していた<sup>15</sup>。後述するが、より多くの一世代が社交の場を持つようになったのは、英語が話せる二世が成長してからである。重要なことは、一世がその寡黙な勤勉さによって純粋に評価され、住民との付き合いを拒んでいるという否定的な見解を持たれることは無かったという点である。

#### ②「ジャップ・ファーム」の真弓吉雄・康雄兄弟

三重県出身の銀行家で実業家、裕福な地主、そして元衆議院議員の真弓吉雄は弟の康雄と共に、ボーモントの10マイル南のファネットに1,734エーカーの米作農場を構えた。真弓兄弟は近隣住民と良好な関係を築いており、例えば農場内に建設したホールに近隣の住民を招いたり、地域の人々を隣町の病院まで車で送迎したといった証言

が残っている<sup>16</sup>。

かつてファネットにあった「ジャップ・ロード」は、真弓兄弟の地域経済に対する貢献を讃えて命名されたものである。この名称は、地域住民には「マユミ (Mayumi)」と発音するのが難しかったため、兄弟が「ジャップ」と名乗っていたことに由来する<sup>17</sup>。2008年3月には、テキサス歴史委員会 (THC) により真弓吉雄の米作農場の功績を讃える記念碑が、その道路沿いに設置された<sup>18</sup>。

### ③「日本農業会社」の高山大枝丸とクラバヤシ・S

日露戦争の元砲兵隊少佐、高山大枝丸（おしまる）は、クラバヤシ・S（倉林新次郎という漢字が当てはまるかもしれない）と共同で、ビクトリアとポートラバカの間に位置するダコスタの近くに「日本農業会社」を設立し、5,200エーカーの土地を確保した。そこでは27人の若い日本人を雇い、日本式の伝統的な労働集約型の米作で注目された<sup>19</sup>。

地元の人々の話では、日本人は建物や設備を清潔に、手入れが行き届いた状態を保つためにいかによく働かかかっている。加えて、日本人は滅多に荷馬車に乗らず、代わりに自ら歩くことを好んだが、それは馬と同じく人間も自らの重荷に耐えるべきだと考えたからである<sup>20</sup>。

### ④カンタローブ栽培で成功した下津卯一・高子夫妻と息子ハリー・ケネス兄弟

下津卯一はコロラド州立農業大学在学中、ある教授から、テキサス南部の低木地帯を灌漑によって生産性の高い農地に変えていった様子を聞いたことがきっかけで、卒業と同時に、マカーレン郊外のサンファンに移住し、2年間農業に従事した。やがて、ハーリンジン近くのサンベニトに移住した。卯一・高子夫妻の二人の息子、ハリーとケネスは卯一が遺した1,200エーカーの土地で農場を経営した。二人はまた、梱包・配送業にも携わり、自分たちの農作物だけでなく他の農家の分も取り扱った。加えて、ハリーは農業会社のために6,000エーカーの土地を管理した。先祖の習わしに従い、彼らは家の周りの美化に努め、多様な商売で地域経済の振興に貢献した<sup>21</sup>。

### ⑤川畑実・トク夫妻

川畑夫妻はブラウンズビル付近の砂糖農園で働いた後、1,000エーカーの土地で農業を行い、自分たちと他の日本人の農作物を取り扱う梱包・配送事業も展開した。ひょうによる作物の甚大な被害、世界恐慌、また自身の大病と困難な時期が続いたものの、川畑実は地域に教会を建てるなど、人々からの信望が厚かった<sup>22</sup>。

### ⑥貧しいメキシコ人を主な相手に医療を行った古河内貞一

エルパソの医師、古河内は貧しいメキシコ人を相手に医業を行った。彼は無料で出産の介助を引き受け、2ドルの診察料を払えない患者にも対応した。彼はまた、「エルパソ日本学園」（後述）の設立にも寄与した。戦時中、サンタフェの強制収容所に送られ、釈放が可能となった後も医師が不足していた収容所に最後まで残り、医療に携わった。戦後エルパソに戻ってからも、貧困者や恵まれない人々を救済することに対する彼の献身的姿勢が揺らぐことはなかった。人道的精神と善行により、古河内は1960年に日本政府から瑞宝章を授与された<sup>23</sup>。

## 2. 暮らしの側面から見た受容と同化

テキサス日系人は、アメリカの文化や慣習を取り入れるのが他のマイノリティよりも早かった。もちろん日本の伝統は自分たちの生活圏内に残ったが、それは家族やコロニーの規律や絆を維持し、二世の速やかな同化を促進した。

### ①服装

テキサス日系人は、一般のアメリカ市民と同じスタイルの服装をすぐに取り入れた。男性は外ではお洒落なスーツにネクタイ、女性は着物の代わりに、1900年代初期に流行った腰回りが細く、ハイネックのドレスを着ていた。それでも、日本人女兒の服はアメリカ人女兒のそれより丈が長く手足がより隠れ、また、日本人女兒の中には長髪の子もいるといった違いも見られた。家の中では、畳こそ無かったものの戸口で靴を脱ぎ、日本と同

じ伝統的な生活様式を維持していた<sup>24</sup>。

一方、現地の人々の印象に残ったのが農作業に用いた蓑(みの)、笠そして草履であり、「日本式のいで立ちで農作業をするなど、伝統も維持された」と紹介されている。大きく丸い稲わら笠はテキサスの強い日差しから労働者を守り、同様に稲わらで作られた草履も野良仕事で重宝された<sup>25</sup>。記者のジョージ・S・ブルースはダコスタの高山農場(前述)における日本人の装いについて、1906年8月25日発行の『Farm and Ranch』誌に以下の様に記述している<sup>26</sup>：

日本人の農民たちは、丸い稲わら笠に同じく稲わらのレインコート(蓑)という伝統的な装いをしていたが、それは首の回りで結んだ袖なしマントと、腰回りで縛る帯のついたスカートを組み合わせから成るものだった。このコート(蓑)は、わらを拵げると雨水を遮断してくれるので、雨天時にはかなりの雨よけになると聞かされた。



写真2 テキサス大学サンアントニオ校テキサス文化研究所に展示されている、稲わらの蓑・笠・草鞋(2011年3月筆者撮影)

## ② 価値観・規範

家父長制や年功、家族の絆や勤労を重んじ、人を傷つけたり窃盗を働いたり、嘘をつくことを禁じ、他者に敬意を払うといった、日本の伝統的な価値観が守られた<sup>27</sup>。テキサス日系人はまた多くの子供をもうけ、大家族を形成することを重視した。子供たちは近くの公立学校に通いすぐに英語を習得したが、家では母親が子供達に日本の民話や童話を話して聞かせ、日本語を教え、家庭で伝

統行事を執り行うことで、子供たちへの継承を試みた<sup>28</sup>。エルパソでは、二世のために西海岸の同様の学校を見本にした日本語学校「エルパソ日本学園」が設立された。子供たちは公立学校の授業を終えた放課後に、そこで日本語と日本の慣習を学んだ<sup>29</sup>。

1930年代に入ると道路も整備され、交通手段も便利になり、テキサス日系人の社会的生活は著しく向上した。自動車が普及する前は、広範囲に散在しているお互いの家の往来には週末のほぼ全てを費やさねばならなかった。二世の子供たちが成長してくると、一世の親たちは彼らのために社交クラブを作った。こうしたクラブの月例会では、食事、歓談、ゲーム、ダンス、パーティー、ピクニックを楽しんだ。教会のサマーキャンプで行われた修養会を共に過ごしたり、観光旅行や舞踏会も行われた<sup>30</sup>。

## ③ 宗教

寺社での礼拝をテキサスで再現するのは不可能だったが、先祖の供養は家庭内で日常的に続けられた。日本人の中にはキリスト教に改宗した者もいたが、それでも家庭には仏壇や神棚が置いてあった。例えば西原清東(前述)はウェブスターの長老教会に積極的に関わっていたが、彼の父親が移住してきた際には、先祖が確実に付いて来てくれるよう過去帳を持参した。熱心なメソジスト教徒であった岸吉松(前述)は、日本に一時帰国した際に磁器の仏像と、実家の仏壇からやはり過去帳を持ち帰っている。キリスト教徒であるか否かに関わらず、どこのテキサス日系人宅の仏壇でもロウソク立て、線香立て、それに新鮮な花を挿した花瓶が先祖の遺影の周りを囲んでいた<sup>31</sup>。8月には盆踊りを行い、墓参りでは墓の掃除の後、食べ物や花、線香が供えられた<sup>32</sup>。また、ダコスタの高山大枝丸(前述)をはじめ、多くの日本人は先祖の位牌を持参していたことも記されている<sup>33</sup>。

テリーの町には教会が無く、岸は3エーカーの土地を寄付し小さな白い教会を建て、誰でも礼拝出来るようにした。岸はその教会に1,800ドルを寄付し、月に一度説教にやって来る牧師の給料の半分を負担した。日曜学校の教師や町の教会

関係者たちは岸の家に滞在し、岸自身も英語を話せない日本人のために日曜学校で信仰を教えたり、二世の子供たちに日本語を教えた。教会で週4回開かれた幼稚園の後援もした<sup>34</sup>。一世の中には仏教徒のままでいた者もあったが、二世の多くはキリスト教徒となった<sup>35</sup>。

ヒューストン郊外アルバンで最盛期には約100人を雇うほど成功した、苗木園の経営者、新居三郎（後述）の妻姜子はテキサスに来てからキリスト教に改宗し、日本人向けに毎週聖書勉強会を開いた。1931年に、姜子はアオノ・チカコと共に、地域の日本人女性だけから成る聖書勉強会「イエスの友の会」を立ち上げた。毎週の会合に定期的に参加していた10名ほどの女性たちは、第二次世界大戦が始まってからも集まり続けた。戦時中は5人以上の日本人による集会は禁じられていたが、日本語の読み書きと会話が達者な元宣教師、セシル・ランカスターという名のヒューストン在住の女性が保証人となり、彼女らは規制から免除されたのであった<sup>36</sup>。

#### ④英語の使用

写真花嫁として1913年に、ウェブスター付近で野菜栽培に従事していた小林光太郎と結婚した24歳のシゲタ・モトは大阪クリスチャンカレッジを卒業し、英語を学んだが、それでも日本語以外の会話はあらゆる面において苦労した。そのため、日本人以外の付き合いではもっぱら夫に頼っていた。地域には他にも日本人がいたが、モトは深い孤独感に襲われていた<sup>37</sup>。

多くの一世にとって、英語の習得には時間がかかった。大抵の移民集団と同様に、流暢な英語能力を獲得したのは二世であった。二世の多くは両親から日本語の読み書きを教わったが、それは家族同士の会話で用いるためであった。二世が成長すると、一世の親たちの通訳の役割を果たすことが出来た。子供たちは家庭以外では英語を話すよう促された。英語と日本語の両方の習熟を重視したことで、二世はヨーロッパ系移民社会の多くの若者たちのように、二つの文化のそれぞれにしっかりと足を据えて成長した<sup>38</sup>。

#### ⑤異人種間通婚

日本人男性が地域の白人女性と結婚することは極めて稀であった。こうした結婚に対する白人の抵抗感もあったし、日本人男性も自分と同じ人種の女性を結婚相手に選ぶことを望んでいたからである<sup>39</sup>。

1908年の日米紳士協定後も、既にアメリカに居住している男性に嫁ぐ場合に限り、女性の入国は認められた。当時西海岸では日本人移民が集中し、排斥気運が高まったことから、日本政府はテキサスでの米作事業者には「定住農夫 (settled agriculturists)」というステータスで旅券を発行した。彼らは紳士協定後も日本に帰国し、アメリカに再入国できるという特権が認められていた<sup>40</sup>。テキサスで農業に従事する日本人の多くは独身の若手男性であったため、日本に戻り結婚した後、新妻とともに再渡米する者も多くいた。また写真花嫁を迎えたり、メキシコ人女性を配偶者を選んだ者もいた<sup>41</sup>。エルパソでメキシコ人と結婚した日本人の中には、リオ・グランデ川の対岸のフアレスの町に移り、ローマカトリック教徒になり、スペイン語の名前やニックネームを持ち、メキシコ人相手の店を開いた者もいた。子供たちは他の日本人から隔離された環境で育ったので、どちらかと言うと自分たちを、メキシコ人だと認識していた<sup>42</sup>。

#### 1921年テキサス外国人土地法制定の経緯

1920年11月、カリフォルニアで外国人の土地所有および賃借を禁止する土地法が制定された。白人農家の生活を脅かしていると非難された一世が所有・賃借した土地は、実際には同州の改良農地のわずか0.02パーセント以下に過ぎなかったにも関わらずである<sup>43</sup>。

カリフォルニアにおける排日宣伝作戦は、テキサスを含む他州の人々の感情を掻き立てた。日本人に対する組織的な反抗は新しいものであったが、人種的偏見や差別は1920年代初期のテキサスでは、残念なことだが紛れもない事実であった<sup>44</sup>。もう一つの重大な増悪因子は、長いこと反日活動の前線にいた米国在郷軍人会 (the

American Legion) という退役軍人組織が果たした役割であり、彼らの日本人移民への反感は積年のものであった。それはカリフォルニア州共同移民委員会(前身はアジア人排斥同盟)の当初からのメンバーとして、カリフォルニア外国人土地法制定の中心的役割を果たした。テキサス住民の大多数は土地法制定に無関心であったにも関わらず、議員たちは軍人会が持つ政治的影響力のため、その法案を単に無視できなかつたのである<sup>45</sup>。

1920年以降、より友好的な環境を求めて西海岸から多くの日系人が移住してくると、地域住民は侵略と捉え、反発するようになった<sup>46</sup>。そんな中、カリフォルニアから移住してきた一世がエルパソの土地を購入していることに反応した軍人会のリーダーたちは、地域住民に対して、日系人の移住を阻止するよう呼びかけた<sup>47</sup>。テキサス外国人土地法にはカリフォルニアと同様の法律制定を目指した米国在郷軍人会テキサス支部が関与しており、彼らの運動はエルパソの上院議員リチャード M. ダドリーによる州議会への法案提出へとつながった<sup>48</sup>。

1920年12月下旬、ハーリンジンの『米国在郷軍人会新聞』の H. L. オラーはブラウズビルで、200人の群衆を前に演説した。彼のメッセージは明確なもので、リオ・グランデ川流域地方にこれ以上の日本人に来て欲しくないというものであった。これを遂行する彼の計画は、単純なものであった。もし新しい日本人が来ようものなら、必要なら暴力に訴えてでも退去させる、というものであった。2週間後の1921年1月に実際に起きたことであるが、カリフォルニアから来た日本人家族がハーリンジン駅で一群の人々と遭遇し、単刀直入にお前たちは歓迎されていないと言われたのであった。その扱いに衝撃を受け、日本人家族はすぐにそこを立ち去った<sup>49</sup>。

日本人家族が退去を求められる

1月6日、テキサス州ハーリンジン—農地に定住する目的で、水曜日に西海岸からハーリンジンに到着した2組の日本人家族は、鉄道駅で地元市民の団に、「お前たちの存在は、ここハーリンジンでは相応しくない。一晚滞在するのは構わないが、木曜日には去

るように」と大胆に近寄って言葉を掛けられた<sup>50</sup>。

同様の出来事が、同じ週の直前に別の日本人家族に対して起きている<sup>51</sup>。

1921年の上院での公聴会では、軍人会とテキサス日系人の代表らが意見をぶつけた。ブラウズビルのハーバート・ダベンポートは、「我々は先にここに住んでおり、リオ・グランデ川流域地方は日本人のものではなく、我々のものだ」と証言した。法案の支持者たちは、日本人は「同化不能」であり、「白人」コミュニティの一部に組み込まれることは決してない、という申し立てをした<sup>52</sup>。

テキサス日系人も黙ってはいなかった。州南東部全域の日本人とダラス=フォートワース地域の日本人経営の綿織物会社の事業者と労働者らは結束して、数名の弁護士を雇った。こうしたロビイストらは上院の公聴会の前に登場し、書面や白人隣人たちからの支持を表明する手紙が提出された。日本人会の指導者の一人が新居三郎(前述)で、ヒューストンの日本人社会で尊敬を集めていた人物である。彼はその法案が日系人にとってどれだけ侮辱的なものであるか、そして日本はテキサスの栽培農家から毎年100万バールもの綿を購入していることを考えると、その法案がテキサスの綿産業にどれだけの損害を及ぼすかを説いた。上院議員たちは、写真花嫁がどのように選ばれているのか尋ねた。新居はその慣行について説明し、そうした婚姻方法が伝統的な日本式の求婚に適合していることを説いた。更に疑いの目を向けられると、写真花嫁は日本政府によって送られた訳ではなく、この慣例はとにかく既に終わったものであると明言した。新居は1904年に米作のためにテキサスにやって来た経緯や、合衆国の市民権を申請したが、単に法律がそれを認めなかつたために拒否されたといった身の上話をした。そして新居は彼自身と仲間の心情をまとめた陳述書を提出した<sup>53</sup>。

公聴会の後、『ダラス・モーニング・ニュース』紙はすぐさま「この法律の必要性があるとするにせよ、緊急を要するものではないことは確かだ」

と、法案に反対する社説を掲載した。法案はテキサス議会上院で満場一致で可決された後、下院に送られると、コーパスクリスティ選出の下院議員 W. E. ポープが「この法律が効力を発生する日付の時点における州内の正規定住者」という規定を除外すべく、法案を容易く修正した。この既得権条項により、既に州内に居住する一世は土地の所有が引き続き認められ、かつ将来に渡って更なる土地購入の権利も保証されたのであった。法的効力は後退したものの、より強固な法律は単に採択されないことを悟った軍人会と上院議員ダドリーはこの修正案を受け入れた。こうして1921年4月1日のテキサス外国人土地法では、新居三郎率いる日本人会の陳情が功を奏し、日本人の農業における影響力を以てその法的効果を軽減させることに成功した<sup>54</sup>。

### テキサス日系人の受容と同化の要因

テキサス日系人と地域住民との概して良好な関係は、西海岸でしばしば見られた敵意に満ちた人種関係とは好対照をなしている。この相異の主要な要因を、同化理論的視点に基づいて示してみたい。同化の要因として、「移住の自発性」、「移住の目的」、「移民集団の大きさ」、「移民とホスト社会との間の社会的距離」、そして「移住のタイミング」が挙げられる<sup>55</sup>。集団の教育・所得水準や職業に加えて、民族に縛られないフォーマルな組織の会員であること<sup>56</sup>、そして居住地が隔離していないこと<sup>57</sup>も同化の指標となるが、テキサス日系人にとってより関連性が深いと考えられる、以下の4点を挙げたい。

#### ①「移住の目的」

テキサス日系人は現地の要請に応じ、定住目的で渡米し歓迎された。カリフォルニアの代わりにテキサスを選んだ理由として、開拓者精神と、日本のコメ不足に関連した、テキサスへの熱意がある。当時の日本はコメ不足で、朝鮮や台湾からの輸入に頼っていた。人口が増加する中で更なるコメの需要が明白であったことから、テキサスでの豊かなコロニーはコメの供給源の一つになる可能

性を秘めていた<sup>58</sup>。

#### ②「人口比率」

大部分の一世が住んでいたカリフォルニアと比較して、テキサス日系人は圧倒的に少なかった。例えば1920年では、450万人以上のテキサス州人口に占める日系人はわずか449人であったのに対し、350万人以下のカリフォルニア州人口の中で日系人は7万人以上もいた。絶対数が少なかったため、その存在が脅威と捉えられる可能性も自ずと低かった。

#### ③「移民とホスト社会との間の社会的距離」

他の人種・民族集団の第一世代と同様に、一世は外部との接触が経済的事項に限られていた<sup>59</sup>。それでもカリフォルニアと比較して、テキサス日系人の方が地域住民との絆が強かった。それは、一世の「勤勉性」といった特徴が、テキサスでは州に対する経済的貢献と見なされたのに対し、カリフォルニアでは白人労働者に対する経済的脅威と捉えられたことを意味した。もちろん一世に対する偏見や差別はテキサスでも見られたが、カリフォルニアの比では決してなかった<sup>60</sup>。

西海岸の一世の目標は概して、短期間のうちに出来るだけ多く貯蓄し、早く帰国することであった。そのため彼らの多くはすぐに元が取れ、現金収入の得やすい店舗経営や農業（特に輸送園芸）に就き、白人よりも日本人との交際を望んでいた<sup>61</sup>。こうした一時滞在的な出稼ぎ志向の強い日系移民は、出身地や親族のつながりに基づいた生活を送っていたため、アメリカ社会を広く捉えることに積極的ではなかった<sup>62</sup>。

#### ④「合衆国内外の情勢」

これは受容や同化の程度に影響を与えたと言うよりはむしろ、20世紀前半のテキサス日系人人口が低調であった直接的な要因として挙げられよう。1908年には、新規男性労働者の移住を禁じた日米紳士協定が制定された。そして1921年のテキサス外国人土地法以降、州外からの日系人の移住は大きく減退した。テキサスに日本人を引き付けたのは何と言っても農業であった訳だから、



1920年代にテキサスにやって来た日本人の数は見通しを下回った<sup>63</sup>。

1924年には、排日移民法が制定された。これによりアジアからの移民が全面的に禁止されたことは、すでに現地に暮らしている日系人をひどく落胆させ、こうした冷遇に見切りをつけて、一世の3人に1人が帰国した。そうした者の中には、日本人花嫁を望んでいたが合法的に合衆国に連れて来る術を失った、未婚の男性が数多く含まれていた。他の者は単に、日本に残した家族を呼び寄せただけだったが、それも叶わなかった<sup>64</sup>。

テキサス日系人人口は元々少なかったが、女性が多くの子供を産み育てたので、その規模は戦後まで数百人程度で推移していった。1930年から1940年にかけて、その数は519人から458人に減少した。世界恐慌がこの減少の要因の一つであることは明らかであるが、排他的な法律の長期的な影響を反映した数字でもある<sup>65</sup>。

上記以外にも、米国在郷軍人会の様な反日主義団体の存在が、日系人の暮らしを大きく左右したことは言うまでもない。

### 古典的同化理論と分節化された同化理論の観点から見たテキサス日系人

古典的同化理論によると、マイノリティは大抵複数の世代をかけて、同化の進行に伴い社会経済的水準が上昇すると仮定され、それは「直線的同化」と称される<sup>66</sup>。この理論が示す同化の過程の中で、例えば主流社会の価値観や規範を取り入れる「文化的同化」をはじめとして、親しい知り合いとして受け入れられる「一次的同化」、住居や教育、職業、娯楽といった領域で正当な仲間として容認される「二次的同化」、集団間における偏見の放棄となる「態度の同化」、それにマイノリティが個人々の真価や成果を基に判断されることによる、差別の減退となる「行動の同化」といった現象が、テキサス日系人に当てはまっている。一方、当時は白人との通婚や一世の市民権の獲得が見込めないといった、社会全体が制度的な差別の時代でもあった。

分節化された同化理論で強調される一つの経路が「選択的文化変容」であり、それによると移民

は選択的にアメリカ社会に同化する一方で、同時に家族関係や自己規律、儉約といった伝統的価値観や規範、慣習の一部を保持するという<sup>67</sup>。移民コミュニティはまた「ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)」<sup>68</sup>を促進し、それは社会的ネットワークや協力的な経済行動を助長することにより、経済的機会を増進するとされる。

こうした現象も、テキサス日系人の記述によく当てはまっている。彼らはまた事業が不調に終わった者を雇ったり他の働き口を紹介するなど協力し合い、1906年のサンフランシスコ大地震や1920年のカリフォルニア外国人土地法の際には、テキサスに移住することを望む日本人を助けることに責任を感じ、援助を惜しまなかった。反日感情を逃れてテキサスに移った者は安堵と恩義を感じて労働に励み、それが益々地域住民との信頼を深めた可能性も大いに考え得る。

### おわりに

テキサス日系人の多くは、農場経営者を中心にコロニーを形成していた。彼らの生活史の一端から、近隣住民との良好な関係が見て取れる。それは、彼らが使命感を抱いて定住目的で渡米したこと、移民による開拓が望ましいと認識されていたこと、そして法律の影響もあり、人口規模が小さかったこと、といった条件によって説明し得る現象である。テキサス日系人のコロニーは、日系人だけで完結していた西海岸の日本町とは大きく異なる。

本稿で模索した、西海岸の状況とは対照的なテキサス日系人の受容と同化は、戦時中における日系人の強制収容の経験を見つめ直す上でも有益であろう。テキサスはその対象地域ではなかったが、それでも一世男性の多くが拘留され、白人の隣人らが忠誠心を保証することで釈放されることがあった。野菜販売をはじめとした日系人の商売は、引き続き好調だったという記述もある<sup>69</sup>。

冒頭で述べたとおり、今後の課題として、標本数が少なくごく基礎的な情報に限られるが、センサスの量的データから得られた人口動態的特徴を加味する余地もある。また、本稿で取り上げたの

は一世だけであるが、受容や同化の議論には戦時中に青年・成人期を迎えていた二世の考察も必須である。加えて、本稿では1921年のテキサス外国人土地法における既得権条項が認められた経緯を、テキサス日系人の受容を示す好例として挙げたが、収容所や合衆国軍における経験も改めて振り返る必要がある。このように、テキサスにおける一世および二世のおよそ40年間に渡る戦前・戦中期を見つめ直すことが、筆者の今後の課題である。

## 註

1. 本稿におけるテキサス日系人の漢字氏名は、以下を参照した。T・K・ウォールズ著／間宮國夫訳、『テキサスの日系人』。芙蓉書房出版。1997年。
2. Brady, Marilyn Dell. 2004. *The Asian Texans*. College Station, TX: Texas A&M University Press, p. 41. Walls, Thomas K. 1987. *The Japanese Texans*. San Antonio, TX: The University of Texas Institute of Texan Cultures at San Antonio, p. 41.
3. Brady, *op. cit.*, p. 41. Chan, Sucheng. 1991. *Asian Americans: An Interpretive History*. New York: Twayne Publishers, p. 71.
4. 構想は失敗に終わったものの、1903年にはアメリカ有数の絹の産地を目指したエルパソの有力者たちが、日本人の移住を促している (Brady, *op. cit.*, p. 51).
5. Walls 1987, *op. cit.*, p. 8.
6. Brady, *op. cit.*, pp. 42-43. Walls 1987, *op. cit.*, pp. 42-48.
7. 佃陽子。「「ジャップ・ロード」改名論争にみる現代アメリカの多文化主義」。『教養論集』。28:63-109. 2018年3月。成城大学法学会, p. 68. 間宮國夫。『西原清東研究』。高知市民図書館。1994年, pp. 314-318.
8. Brady, *op. cit.*, p. 41. Walls, Thomas K. 2007. "The Early Japanese Texans." pp. 91-111 in Irwin A. Tang, Ed. *Asian Texans: Our Histories and Our Lives*. Austin, TX: The it Works, p. 96.
9. Walls 1987, *op. cit.*, p. 39.
10. *Ibid.*, p. 124.
11. Walls 2007, *op. cit.*, p. 99.
12. 1 エーカーはおよそサッカーグラウンド1つ分に相当する。
13. Brady, *op. cit.*, pp. 46-49. Walls 1987, *op. cit.*, pp. 93-96. Walls 2007, *op. cit.*, p. 103. 川井龍介。「テキサスに夢を見た100年前の日本人一米作ブームを機に野菜栽培、そして油田も一」。JBpress. 2013年9月3日掲載。https://jbpress.ismedia.jp/articles/-/38605. テリーの町はもはや存在しないが、1982年10月3日、岸コロニーの人々の努力が州当局に認められ、コロニーの跡地に歴史記念碑が建てられた (Walls 1987, *op. cit.*, p. 96). 2007年には、テキサス歴史委員会 (THC) がこの地における岸の功績を讃えて、ビダーの南東7マイルを走る農地・市道道路1135号線を「キシ・ロード」と名付けた。それ以前にも、岸をはじめとしたこの地における日本人の功績を讃えた道路には、オレンジ郡の中央部ヴィドーを東西に走っていた「ジャップ・レーン (Jap Lane)」があった。
14. Brady, *op. cit.*, pp. 46-49.
15. Walls 1987, *op. cit.*, pp. 74-75.
16. Kato, Naoko. 2007. "Japanese Texans after World War II." pp. 255-262 in Irwin A. Tang, Ed. *Asian Texans: Our Histories and Our Lives*. Austin, TX: The it Works, p. 260. Walls 1987, *op. cit.*, pp. 81-82. 佃, *op. cit.*, p. 70.
17. 佃, *op. cit.*, p. 71.
18. *Ibid.*, p. 98.
19. Walls 1987, *op. cit.*, pp. 96-98. Walls 2007, *op. cit.*, pp. 99-100.
20. Walls 1987, *op. cit.*, p. 100.
21. *Ibid.*, pp. 106-108. Walls 2007, *op. cit.*, p. 108.
22. Walls 1987, *op. cit.*, pp. 114-115. Walls 2007, *op. cit.*, pp. 108-109. 川井, *op. cit.*
23. Brady, *op. cit.*, pp. 56-57. Walls 1987, *op. cit.*, pp. 104-105.
24. Brady, *op. cit.*, pp. 49, 59-60. Walls 1987, *op. cit.*, p. 77.

25. Walls 1987, *op. cit.*, p. 77. Walls 2007, *op. cit.*, p. 95.
26. Walls 1987, *op. cit.*, pp. 97-98.
27. Brady, *op. cit.*, p. 7. Walls 2007, *op. cit.*, p. 96.
28. Brady, *op. cit.*, p. 46. Walls 1987, *op. cit.*, pp. 90-91.
29. Brady, *op. cit.*, p. 57.
30. *Ibid.*, p. 55. Walls 1987, *op. cit.*, pp. 117-118.
31. Brady, *op. cit.*, pp. 58-59.
32. *Ibid.*, p. 60.
33. Walls 1987, *op. cit.*, p. 99.
34. *Ibid.*, pp. 93-94. Walls 2007, *op. cit.*, p. 103.
35. Walls 1987, *op. cit.*, p. 94.
36. Brady, *op. cit.*, p. 53. *Ibid.*, pp. 125-127.
37. Walls 1987, *op. cit.*, p. 142. 小林光太郎は町の発展に伴い所有地を道路として提供したことから、そこは今でも「コバヤシ・ロード (Kobayashi Road)」と名付けられている (川井, *op. cit.* Brady, *op. cit.*, p. 50. Walls 1987, *op. cit.*, pp. 140-142). また、ウェブスター近郊で520 エーカーの農地を構えたものの1年目に事故死した前川真平を悼んで、ヒューストン南部の郊外を走る幹線道路の一つが「Mykawa Road (マエカワ・ロード、ただし読みやすいよう綴りは若干変更してある)」と名付けられている (Walls 1987, *op. cit.*, pp. 60-61. Walls 2007, *op. cit.*, p. 98).
38. Walls 1987, *op. cit.*, pp. 77-78, 91.
39. *Ibid.*, p. 66. 白人と有色人種の結婚、つまり異人種間通婚は、一世の時代は法律で禁じられていた (例えばカリフォルニアでは、1948年以前) (McLemore, S. Dale, Harriet D. Romo, and Susan Gonzales Baker. 2000. "Japanese Americans." pp. 149-185 in McLemore, S. Dale, Harriet D. Romo, and Susan Gonzales Baker. *Racial and Ethnic Relations in America*, 6<sup>th</sup> Edition. Boston, MA: Ally and Bacon, p. 173).
40. Brady, *op. cit.*, p. 44. 佃, *op. cit.*, pp. 66-68.
41. Brady, *op. cit.*, pp. 44, 55. Walls 1987, *op. cit.*, pp. 66-67.
42. Brady, *op. cit.*, p. 55.
43. Walls 1987, *op. cit.*, p. 120.
44. *Ibid.*, p. 120.
45. *Ibid.*, pp. 119-121. Walls 2007, *op. cit.*, p. 105.
46. Brady, *op. cit.*, p. 54.
47. Walls 2007, *op. cit.*, p. 105.
48. *Ibid.*, pp. 105-106.
49. Walls 1987, *op. cit.*, p. 119.
50. Brady, *op. cit.*, p. 54. *Austin American*. "Family Told to Move On." January 7, 1921. 傍点は引用者.
51. Walls 2007, *op. cit.*, p. 105. *Austin American Statesman*. "Jap Colonists Warned Away from Harlingen." January 6, 1921.
52. *San Antonio Express*. "Texas Japanese in Rice Belt Protest Alien Land Bill; Rio Grande Valley Send Men from Legion." February 4, 1921. Walls 2007, *op. cit.*, p. 106. 傍点は引用者.
53. *San Antonio Express*, "Texas Japanese Plan Fight on Exclusion Act; Confer in Ft. Worth," January 11, 1921. *Dallas Morning News*, "Alien Exclusion Bill Reported Favorably," February 11, 1921. *San Antonio Express*, "Texas Jap Argues Against Exclusion," February 6, 1921. Walls 1987, *op. cit.*, pp. 121-122. Walls 2007, *op. cit.*, p. 106.
54. *Dallas Morning News*. "Premature and Perhaps Superfluous." February 7, 1921. *San Antonio Express*. "Pope Bill to Bar Japanese from Texas Lands Passes: Present Ownership by Orientals Not Involved." March 10, 1921. Walls 1987, *op. cit.*, p. 122. Walls 2007, *op. cit.*, p. 107.
55. McLemore *et al.*, *op. cit.*, p. 168.
56. *Ibid.*, p. 170.
57. *Ibid.*, p. 171.
58. Walls 1987, *op. cit.*, p. 47.
59. McLemore *et al.*, *op. cit.*, p. 168.
60. Walls 1987, *op. cit.*, p. 75.
61. 山本剛郎. 『都市コミュニティとエスニシティ—日系人コミュニティの発展と変容—』. ミネルヴァ書房. 1997年, p. 111.
62. 南川文里. 『「日系アメリカ人」の歴史社会学

- エスニシティ、人種、ナショナリズム—』. 彩流社. 2007年, pp. 44, 48.
63. Walls 1987, *op. cit.*, pp. 123-124.
64. *Ibid.*, p. 123. グレン・サリバン. 『海を渡ったスキヤキー—アメリカを虜にした和食—』. 中央公論新社. 2019年. p. 160.
65. Walls 2007, *op. cit.*, p. 109.
66. Gordon, Milton. 1964. *Assimilation in American Life: The Role of Race, Religion and National Origins*. New York: Oxford University Press. Warner, William L. and Leo Srole. 1945. *The Social Systems of American Ethnic Groups*. New Haven, CT: Yale University Press.
67. Portes, Alejandro and Ruben G. Rumbaut. 2001. *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation*. Berkeley, CA: University of California Press and Russell Sage Foundation.
68. Zhou, Min. 1997. "Segmented Assimilation: Issues, Controversies, and Recent Research on the New Second Generation." *International Migration Review* 31:975-1008, p. 996
69. Brady, *op. cit.*, p. 63.